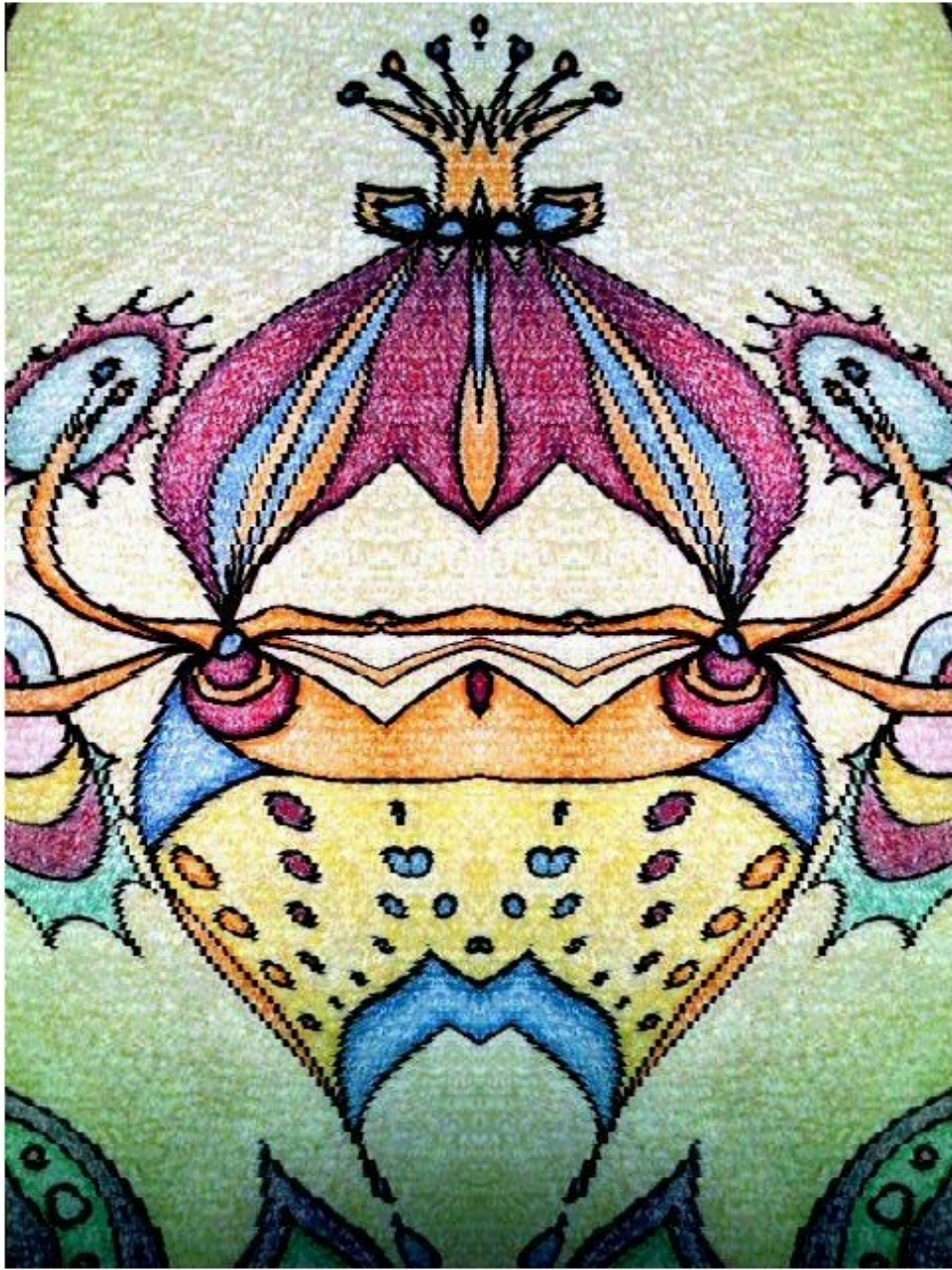


千野家の食卓



mikatuki98

小学三年生の千野利子（ちのりこ）が学校からお腹を空かして帰ると、ママの睡蓮（すいれん）が今夜のおかずは＜鉄板焼き＞よ、と言ったのでランドセルと一緒にぴよんぴよん跳ねて喜んだ。

『やった！ 大好きなゲソをたらふく食べられる♪』

夕飯時になり、利子は丸い食卓のいつもの席に着いた。

ジュージューと鉄板の上を音を立てながらゲソが踊っている。しっかり閉じていたつもりの唇の端から、涎が垂れそうになる。ゲソをじっと見つめている利子。至福の時。

そんな利子の傍らに、トコトコと三歳になったばかりの弟・白雲齋（はくうんさい）がやって来て、丸い食卓をバンバンと叩きだした。

千野家では子供たちの躰と称して正座をさせ、丸い食卓をぐるりと囲むように食事をするのだが、未だ幼い白雲齋はじっと正座してられない。ママの傍らからフラリと離れると、その日の気分によって家族全員を巡回するのだ。そして彼の今日の標的は利子だった。

「ほら、利子。白雲齋がゲソを欲しがっているでしょ。少し冷まして食べさせて頂戴！」

ママのいつもの台詞だ。でもゲソは利子が……。

『やっと焼けたゲソなのに…… 一番に食べるのは当然このわたしよ。なのに何で白雲齋に先にあげなきゃいけないの？ゲソが大好きなこのわたしが！』

利子は大いに不満だった。そこで考えあぐねた利子は、先ず自分が一つ食べて、次に焼いたゲソを白雲齋にあげようと思った。

「白雲齋、あんたには後であげるからね！」

そう言いながら、利子は焼き立てのゲソをパクリと食べた。

『う～ん、美味しい♪』

利子が口をモグモグさせながら、満面の笑みを浮かべたその時だった。ばきっ！ という何かが折れる音がした。

「ん？今の音……何？」

利子が音のありかを探していると、なんと！ 老朽化していた丸い食卓の脚の部分が折れてしまっていた。これはもう、ゲソ欲しさに食卓の上に身を乗り上げていた、肥満気味な白雲齋のせいだ、と利子は咄嗟に思った。

と、三本脚になってしまった丸い食卓がぎっしぎっしと揺らぎ始めた。そして僅かに鉄板が動き出すと、食卓は折れた脚の方角へ一気に傾き、加速した鉄板は勢い良く食卓の上を滑った、と、次の瞬間、鉄板は床の上に転がりひっくり返ってしまった。

家族全員が一斉に奇声を上げて非難する。床には転がった鉄板を中心にゲソばかりでなく、肉や野菜がそこら中に散乱している。

「わぁ～～～ん、白雲齋！ あんた何てことしてくれたのよお～～～」

直接の原因である白雲齋を責める利子。

「あんたが直ぐにゲソをあげないからよ！」

ママに責められ、キーとなる利子。

「あんたがゲソを横取りしようとするからよ！」

利子に責められ、キーとなる白雲齋。

「大体、ふたりともそんな年でゲソが好きなのがヘンなんだよ！」

小学六年生の兄・薔薇丸（ばらまる）と双子の姉・紅百合（べにゆり）が声を揃えて言うと、幼稚園に通う六歳の悟念（ごねん）が釣られて叫び出した。

「ヘンだ！ ヘンだ！ ヘンだ！ ヘンだ！」

ヘンだ！ を連発する悟念にパパの楽雲齋（らくうんさい）が雷を落とした。

パパが茶道の家元である千野家の食卓は、いつも賑やかだ。